

本学部に残る様式建築オーダー（東京銀行本店）の遺産について

日大生産工 ○小倉 大助

日大生産工 藤谷 陽悦

1. はじめに

建築界において、1960年代～1970年代は戦前・戦後に建てられた建物が高度経済成長の中で建て替わっていった時代である。こうしたなか、帝国ホテル（1923年、F・Lライト）、三菱一号館（1894年、J・コンドル）、リーダーズ・ダイジェスト東京支社（1951年、A・レーモンド）といった名作が次々と取り壊されていった。しかし、それと同時に当時は近代建築の保存運動が始まった時代でもあり、本研究対象とする横浜正金銀行東京支店（1946年に東京銀行本店と改称）はこれらの保存問題の先駆けとなった建築と言われている。

2. 研究の目的

本研究は、本学部（日本大学生産工学部）に残る様式建築オーダー（東京銀行本店）の遺産について、まず、東京銀行本店と設計者長野宇平治の歴史的位置づけを検証し、保存運動の記録について整理する。

（3章、4章）次に保存運動の中心人物であった山口廣（日本大学名誉教授）から聞き取り調査を行い（5章）、遺産が本学部に残された経緯を明らかにする。そして、この遺産の価値を検証し今後どのように活用されるべきかを考察する。（6章）

3. 東京銀行本店と建築家長野宇平治について

東京銀行本店は1927年に竣工した新古典主義の建築である。その前身は横浜正金銀行で、海外貿易のための国策銀行であった。日本銀行（日銀）と同じく、辰野金吾の弟子であり、日銀技師であった長野宇平治が設計を担当している。長野宇平治（1867～1937）は恩師辰野金吾の遺業を継ぐべく、各地の日銀支店の建設に腕をふるい、古典主義建築家として力を発揮した大正、昭和初期を代表する建築家である。

東京銀行本店は長野の円熟期の作品であり、銀行建築によく見られる三層構成のオーソドックスな様式建築で、昭和期の歴史様式による建築の保存を訴える最初の事例の一つである。

4. 東京銀行本店保存運動の記録

表1は東京銀行本店保存運動の年表である。

表1. 東銀保存運動の経緯（新建築,(1976), pp198～202を参考にして作成）

年月日	保存運動の経緯
1974,10	新宿三井ビルディング竣工。三井2号館のフロアが空き、東銀が移転先に決定。
1975,6,4	松村貞次郎、山口廣、藤森照信、堀勇良が東銀管財部の人々に対して、東銀建築と長野宇平治についてのレクチャーを行う。
1974,6,18	松村が頭取に私信を書く。東京銀行本店を日本近代建築史上の傑作と賞し、長野宇平治を大正・昭和を代表する古典主義建築家とし紹介、また東銀が優れた都市景観を生み出していることを訴える。
1974,7,7	管財部長より口頭による返答。
1974,7,14	松村が要望書を提出する。①建築が個人または民間企業の所有であっても、それが一つの要素として作り上げてきた景観は、市民の共有のものと考えられること。②優れた建造物を所有するものは、たとえそれが個人のものであっても、国民全体に対して保存・保護の義務を負っていること。③東銀本店は大正・昭和初年の日本の古典主義様式建築の代表的な作品であり、これを失うことは日本近代建築史に大きな空白を生むこと。以上のことを主張し、保存に関する話し合いの機会を要望する。
1974,7,21	企画室次長により建替えは計画通りとの返答がある。
1974,7,30	松村、山口の名により建築学会歴史意匠委員会新旧委員に保存のアピールを送り賛同を求める。
1974,9,5	アピール賛同者名簿を東銀側に提出する。
1974,9,19	管財部長より、直面する現実的要請に対処する為には建直しが不可避であるとした上で、後世の参照に耐えるような記録を残す為の建築学的調査へ協力する意志を示すという返答を受ける。それを受け反対派が、東銀側に対し在京研究者の見学会と話し合いの場の設定を要請。
1974,10,27	見学会と話し合いがもたれる。しかし、議論に進展はなくファサード保存の検討を要請することとなる。
1974,11,14	東銀よりファサード保存について工法、工期などが問題点とともに説明され、予算、工期などの問題から実施は無理であるとの結論を伝えられる。
1974,11,20	見学会に出席した若手研究者は「東京銀行本店の建築と周辺の景観を考える会」を結成し、村松、山口のテーブル交渉とは別の行動をとることとしている。

1974,11,27	村松、山口と頭取、建築担当常務との会談で銀行側の新店建設の大方針として、①銀行建築としての伝統と品位、②近代的機能、③工期3年、の3条件についての説明を受け、村松、山口らは建築のファサード保存をあらためて要請する。
1974,12,12	東銀側が指定した窓口である三菱地所により設計者側の方針提示が松村、山口になされる。ファサード保存の検討は、以前行った以上は不要であるとの説明を受ける。
1974,12,18	三菱地所より「東京銀行本店建築保存問題連絡会」の設置をしたいとの提案が松村、山口になされ設置が決まる。
1974,12,23	第1回「連絡会」が開かれ、東銀側よりファサード保存のこれ以上の検討は不要との意志を伝達された
1974,12,26	第2回「連絡会」が開かれ、松村、山口より、東孝光によるファサード保存試案が提出される。これに対し東銀側より法制上、構造上の批判がなされる。
1975	新年に入って「連絡会」は第3回、4回と開かれるものの松村、山口は事業負担による建築記録の作成と刊行を取り決めて、半年に及ぶ計16回のテーブル交渉を閉じた。

表1より東京銀行本店の保存運動は都市景観上の特質を強調して行われたこと^{*1}がわかる。また、この保存運動は建築家と建築史家の共同作業であった点が特徴^{*2}である。高度経済成長期を迎えた1970年代初頭という時代を反映して、テーブル交渉とは別に、保存を訴えるビラを街頭で配布するという試みもなされている。しかし、結果は構造的な安全性に問題があること^{*3}や床面積の不足、従業員（銀行員）の執務空間として暗くて寒い等の理由から全面建替えとなった。

5. 本学部に残る東京銀行本店の遺産について

本学部11号館前に保存されているイオニア式の様式オーダー（角柱）は解体時に東銀側より譲り受けたものである。その後、旧4号館の前に雨ざらしになっていた。当初は学部において後方壁を建て一本丸ごと再生しようとしたが、耐震性などの問題から不可能であった為、柱頭と柱脚に分けて保存されることとなった。また、銀行解体時にチーク材の扉や銀行営業室の格天井の格間を飾る打ち出し模様の装飾（鉄板打ち出し石膏塗り）等も学部内に保存されていたが、扉は余りに大きいため住宅等には転用不可能であった。これらの2部位（銀行営業室の格天井の装飾、チーク材の扉）については紛失した可能性があり、現在確認できない。その他にも、図面一式（原図）が5号館3階に保存されている。



図1. ピラスター柱頭



図2. ピラスター柱脚

表2. 東京銀行本店の遺産リスト

東京銀行本店の遺産	保存場所
①イオニア式様式角柱（柱頭・柱脚）	11号館前
②内部様式柱	4号館1階
③中二階平面図	5号館3階
④第二～六階平面図	
⑤屋上平面図	
⑥東面図（縮尺：1/100）	
⑦南面図（縮尺：1/100）	
⑧東西切断図（縮尺：1/100）	
⑨南北切断図及び金庫部分切断図	
⑩西側詳細図（縮尺：1/30）	
⑪南側詳細図（縮尺：1/50）	
⑫北側詳細図（縮尺：1/50）	
⑬屋根勾配詳細図（縮尺：1/50）	
⑭天井格間留構造詳細図（縮尺：1/20）	
⑮天井格間蛇腹詳細図	
⑯1階天井格間見上図（縮尺：1/50）	
⑰1階天井平面図（縮尺：1/200）	
⑱銀行営業室の格天井の装飾	不明
⑲チーク材の扉	不明

6. まとめ

東京銀行本店の保存運動及び保存について経緯を追うことで以下のことが明らかになった。

- ①東京銀行本店は長野宇平治の円熟期の作品であり、優れた都市景観を構成していた。
- ②当時は機能主義全盛の時代であり、経済性、機能的性が優先される気運があった。
- ③本学部には現在、イオニア式の様式オーダー（柱頭部・柱脚部）、銀行内部に存在したと思われる様式柱、図面類が保存されている。この他にもチーク材の扉や銀行営業室の格天井の格間を飾る打ち出し模様の装飾などが保存されていたが、現在確認できない。

現代では保存に対する意識が高まり、歴史的建物を移築し、公開するなどの積極保存が試みられるようになってきている。これらは教育的観点からみても有効な公開手段であり本学部でも、それらの歴史的遺産の文化的価値を再認識し、教育の現場において活用される事が望まれる。

「注」

*1 表1、1974年,6,18及び1974年,7,14下線部参照

*2, *3 表1、1974年,12,26下線部参照

「参考文献」

1. 日本の様式建築, 新建築, (1976), pp198～202
2. 近江栄, 堀勇良, 日本の建築 [明治大正昭和], 国家のデザイン, 三省堂, (1979), pp157～189
3. たてもの保存再生物語, 東京人, No.236, (2007), p39
4. 鈴木博之, 現代の建築保存論, 王国者, (2005), pp19～20